広間のふすまがすっと開き、黒いエナメルのミニドレスを着た明美が入ってきた。黒いガーターストッキングに黒いヒールをはいている足はすらりと伸びて美しい脚線美だ。その後ろから現れた女性の登場に一同の視線が集まる。後ろ手縛りの元社長夫人、藤川圭子の登場に幹部連中の視線はくぎづけとなり、夫人が広間の中央のコの字型にお膳が並ぶ中に引き立てられる様を凝視していた。後ろ手縛りに夫人を縛り上げた縄尻を明美がつかみ、片手には乗馬鞭を持って引き立てるのだ。夫人は全裸同様で、ブラジャーはカップ部分の三角形以外は全てヒモ状のもので、夫人の悩ましいほどに肉感的な下半身を覆うショーツは前後ともにＹ字になっている露出的な下着である。表面はけばけばしく光り輝くスパンコールでおおわれ、一見してストリップ嬢の衣装である。およそ元とはいえ社長夫人の身には不釣合いな衣装でしかも緊縛された姿を、コの字型の宴会の中央に立たされ、視姦される羞恥に圭子はその場にしゃがみこみそうになる。しかしそのようなことはできない。ふすま一枚へだてたとなりの間には、娘の静江が同じ衣装を

着せられた姿で待機している。圭子は言い含められた淫らな言葉を吐きこの慰労会を盛り上げなければならない。初めは母娘奴隷の同時披露会とするといわれた。めんどりショーや女体習字、噴水芸などの仕込まれてきた淫らな芸を披露し、その後は母娘のレズショーを鑑賞してもらうのだと明美は言うのだ。圭子は土下座し、わたしだけに恥をかかせてくださいと懇願した。明美は条件を出した。元社長夫人奴隷のお披露目会に少しでも気の抜いたような姿を見せたら、すぐに娘に代わりをさせるとおどされ、圭子は

「はい･･･奴隷として精一杯おつとめいたします」

と何度も約束してうなずいたのだ。

　となりの間では静江が待機している。圭子は、顔見知りの会社幹部たちの前で、後ろ手縛りの恥ずかしい下着だけを着用した姿をさらした。圭子は、この宴会に女性が招かれていることを目にした。社長秘書だった来栖小百合ともうひとりははじめて見る女性だ。男性にこのような恥ずかしい姿を見られるのはつらい。顔見知りのよく知っている男性ばかりだ。夫が社長をしていた頃、会社主催のパーテ

ィで顔をよく合わせていた経営陣の幹部ばかりだ。それだけに恥辱感はなおさら圭子を責めたてる。さらに圭子の心を苦しめるのは同性の存在であった。女性にこのようなみじめな奴隷と成り果てた姿を見られるのは、身を引き裂かれるようにつらかった。

「み、みなさま･･･今夜は･･･藤川圭子を、こ、このようなお席にお招きくださりありがとうございます。みなさまには･･･みなさまには･･･社長夫人であったころは、大変お世話になりました。今夜はその感謝の気持ちをみなさまに伝えたく、精一杯･･･は、花電車芸を務めさせていただきます･･･どうぞご笑覧ください」

後ろ手縛りのまま圭子はその場に正座して深々と頭を下げた。満場の拍手が響く。

「まずは･･･け、圭子の身体を･･･隅々まで･･･ご、ご鑑賞いただければ幸いです。」

圭子は今にも泣き出しそうな表情で女性として恥ずかしい口上を述べた。

「どなたか、圭子の･･･ブラをはずしていただけませんか」

後ろ手縛りの圭子は宴席を見渡した。

「木島君、君が外してやりたまえ」

藤田社長が木島伊都夫に声をかける。伊都夫は照れた表情を見せ、髪をかきながらもまんざらではない様子で立ちあがった。

「ではわたしが社長夫人の･･･いや、どうしても社長夫人だったころのイメージが強すぎますな。元社長夫人のブラをとってさしあげましょう」

手を伸ばした伊都夫は、夫人の豊満な乳房をわずかに隠すだけの三角形のブラをはずした。

「これは･･･」

木島伊都夫の手がブラをはずしたところでとまった。眼が見開かれている。圭子夫人の白い乳房がこぼれ落ちるように露出した。その先端の乳首になんと金属のリングが貫通しているのだ。

「驚いたかね、木島君」

すでに元社長夫人の女体の秘密を知っている藤田は、含み笑いをうかべながら副社長の驚く顔を眺めた。

「ピアスですか」
「傑作だろ。美しい奥様が、乳首にピアスをされ、まるで場末のストリップ嬢のようになっているのだ。世の無情を思わないではおれないよ」
ブラをはずされた圭子のまわりに酒に酔った赤ら顔の幹部連中が集まる。そして乳房をまじまじと見るのだ。顔見知りの者たちに女体の秘密を見られる圭子の美しい顔には明らかに羞恥の色が浮かんでいる。酔った会社の幹部連中は遠慮なしにむき出しになった乳房を眺めている。その中には男性の生理現象を股間にはっきりと示している者もいる。
　明美が背中を押した。圭子は
「次はわたしのパンティをどなたか脱がせていただけないでしょうか。圭子は、パンティを脱がせていただき、お、おまんこも･･･そして、お尻の穴もみなさまに見ていただきたいの･･･」
幾度となく強要されてきた破廉恥な言葉だ。接待のたびに圭子はこうして客人たちに媚びをうり、裸体に剥かれるの

だ。しかしさすがに今夜の懇親会の席は、圭子の羞恥心をあおらないではおかない顔ぞろえであり、圭子の声は震えていた。

「奥様のお口からおまんこという卑猥な言葉が出るとは驚きですな」

副社長の木島伊都夫がにやにやしながら、夫人の乳房をさわりだす。

「木島さん、おさわりになるのはまだですわ。圭子を生まれたままの素っ裸にしてからゆっくりとおさわりください。圭子の恥ずかしいところを心ゆくまで触ってください」

圭子はつぶらな瞳を伊都夫に向けた。

「触るだけかい？」

しゃがみこんだ営業部長の唐沢英治は、夫人のストリップ嬢がはくような卑猥なパンティに顔を寄せながら見上げた。伊都夫の次に、夫人は英治と視線を合わせる。顔をそむけることなく、微笑さえもうかべながら

「触られるだけでは圭子はいやですわ。うんと圭子の身体にいたずらなさってください。圭子はみなさまにいじめら

れていっぱい泣かされたいの。うんと圭子に恥ずかしいことをなさってください」
もう先ほどの声の震えはない。羞恥の色を残しながらも、妖艶な色香をにじませているのだ。短時間に圭子は、自分の心の悶えを押さえつけ、これまでも恥辱にまみれてきた性奴隷ではないかという自己暗示と、被虐感からくる落ち着きを取り戻している。取り囲んだ男性たち一人一人に視線を合わせ、そのつぶらな潤みのある瞳で見つめるのだ。後ろ手縛りの圭子は乳房を露出した姿で、甘えた声さえも出し、男性たちの心を淫らにくすぐったりもしてみせた。
「ねえ、早く圭子の一番恥ずかしいところをご覧になって・・・」